

# 四日市市諏訪神社祭礼鯨船行事の伝播

～鈴鹿市長太地区四ツ谷垣内の鯨船部材をとおして～

福田良彦

## はじめに

鯨船行事は、三重県の北勢地域と東紀州地域にのみ残る伝統的な捕鯨習俗を伝える貴重な民俗行事である。北勢地域では、陸上において、鯨船と呼ぶ豪華な船型山車の上で少年が鯨突きの所作を演じ、竹や漁網で作ったクジラと激しい攻防を繰り返す。現在、四日市市内の富田地区、諏訪神社の氏子域（旧四日市町・浜田村）、塩浜地区磯津（以下「磯津」という。）、楠町南五味塚（以下「南楠」という。）の四ヶ所と鈴鹿市内の長太地区一ヶ所に伝承があり、何れの鯨船も上部に屋形を設け、豪華な彫刻や幕等で飾られている。北勢地域は、伊勢湾の奥に位置し、江戸時代に捕鯨漁が行われていた記録は見当たらない。

また、鯨船行事の起源についても明らかではないが、四日市市の富田地区と諏訪神社の鯨船行事は、江戸時代末期には既に行われていたと考えられ、諏訪神社祭礼には、多くの練り物や山車とともに、鯨突きの行事が行われていたと思われる<sup>(1)</sup>。そして、明治時代に入ると、南納屋町の「明神丸」、北納屋町の「勢州組」、袋町の「正一丸」と三町がそれぞれに鯨船を祭礼に出している。南納屋町以外は第二次世界大戦の戦災で鯨船を消失したが、諏訪神社氏子域以南で鯨船行事の伝承がある磯津や南楠などには、諏訪神社祭礼に出ている鯨船を譲り受けたという言い伝え

が残り、鯨船行事が塩浜街道に沿って、南に広がっていった様子が見える。

ところで、北勢地域で鯨船行事を実施している地区で最も南に位置する鈴鹿市長太地区では、これまで諏訪神社祭礼で使用していた鯨船を譲り受けたという伝承は伝えられていなかったが、三重県総合博物館が実施した調査で、明治二四（一八九一）年以降行事を休止している四ツ谷垣内（鈴鹿市長太旭町）の鯨船「長一丸」の部材に、「正一丸」と記された彫刻を確認した。「正一丸」は、諏訪神社祭礼で鯨船行事を行っていた袋町の鯨船の名称であり、鯨船が休止されたとされる年代や現在各地区で使用されている鯨船とは異なる原初的な部材の装飾から、現存する最古の鯨船の部材である可能性が高いと考えられる。本稿では、この四ツ谷垣内鯨船の部材等についての報告をとおして、諏訪神社祭礼に出されていた南納屋町の「明神丸」、北納屋町の「勢州組」、袋町の「正一丸」が周辺地域に伝播して状況について整理・検討を行っていききたい。

## 1 鈴鹿市長太地区四ツ谷垣内の鯨船部材

### (1) 確認の経緯

三重県総合博物館では、令和四（二〇二二）年に開催した第31回企

画展「集まれ！三重のクジラとイルカたち」に伴い、現行の北勢地域の鯨船行事について聞き取り調査を実施するとともに、文献<sup>(2)</sup>に記録がある鈴鹿市長太地区の四ツ谷垣内鯨船についても調査を行った。

四ツ谷垣内の鯨船については、平成三（二〇二一）年の文化庁調査の際にも調査されており、令和四年四月九日に四ツ谷垣内山車蔵で確認調査を行ったところ、天王祭で使用する山車が格納されている蔵の壁に立てかけられた状態で保存されている鯨船の部材八点を確認した。また、同年五月八日に行った保存状況調査の際、長太地区居住の個人の方が自宅で保存されていた鯨船に使用したと思われる幕類四点も新たに確認した。なお、鯨船の台船は残されていなかった。

企画展では、四ツ谷垣内鯨船の部材三点を明治二四（一八九一）年以来ほぼ一三〇年ぶりに公開するとともに、四ツ谷垣内鯨船の概要を図録に掲載した。なお、四ツ谷垣内で保存されていた鯨船に関する部材八点・幕類四点全てについて、企画展展示後に四ツ谷垣内から鈴鹿市に寄贈され、保存されている。

## （2）現行の鈴鹿市長太地区の鯨船行事

現在、鈴鹿市長太地区では一〇月第一土・日曜日に鯨船行事が行われている（写真1）が、平成三（一九九一）年に文化庁による調査が行われるまでは、長く行事が休止されていた。調査を契機に長太地区全体で長太鯨船保存会が設立され、翌平成四（一九九二）年から実施日を変更して、鯨船行事が復活した。

もともと長太地区では、鯨船行事が八月一日の飯野神社の天王祭に行われており、現在も八月一日前後の土・日曜日に、長太地区内の旧町単位の組織である馬場垣内、四ツ谷垣内、中瀬古垣内の三組がそれぞれ所有する山車を曳き出し、山車の上で獅子舞を演じている。



写真1 長太地区の鯨船行事 撮影2023年



写真2 現行の「天王丸」 撮影2022年

かつて鯨船行事は山車の上で獅子舞が演じられた後に、余興的に行われていたとされ、宮本と呼ばれる馬場垣内には「天王丸」、四ツ谷垣内には「長一丸」と二隻の鯨船があったとされている。このうち、四ツ谷垣内の「長一丸」は明治二四（一八九一）年の休止以降、蔵に保管され、馬場垣内の「天王丸」のみが鯨船行事を行っていたが、昭和一二（一九三七）年に中断以降は数度しか行われていなかった<sup>(3)</sup>という。

なお、現在、長太地区の鯨船行事で使用されている鯨船（写真2）は、老朽化していた馬場垣内の「天王丸」とほぼ同じ寸法で、平成六（一九九四）年に新造したもので、北勢地域の他地区の鯨船に比べて一回り小さく、鯨船行事の際も他地区では踊子とともに船上で演技するロコギ役の子どもはみられない。

(3) 四ツ谷垣内鯨船の部材・幕類の現状

四ツ谷垣内鯨船の部材八点、幕類四点(図1)について、以下に記述する。

【部材①】縦二六・八cm×横一九二・五cm×厚三・三cm

表側は厚約一・四cmの一枚板の上に幅約四cm、厚約一・九cmの棧を三本付け、棧・板材・棧・板材・棧と全体を五分割している。棧は黒漆塗で、金泥を塗った長方形の彫刻が七ヶ所に施されている。また、板材は赤く塗られ、上側には金泥を塗った紗綾文が全面に、下側には同じく金泥を塗った入子菱文の彫刻が一四個施されている。部材の裏側には装飾や塗装は施されていない。黒漆塗の一部に劣化がみられるが、保存状況は概ね良好である。

【部材②】縦二五・八cm×横二〇〇・〇cm×厚四・八cm

一枚板の両面、側面下部が黒漆塗で、両面前方に金泥が塗られた龍の彫刻がはめ込まれている。なお、龍は両面とも同一である。また、部材上部の中央と船体側の二ヶ所にホゾが付けられているが、船体側のホゾ一ヶ所は欠失している。部材はホゾで船体に取り付けられたと思われる、船体に接しない先端部分には側面も黒漆が塗られている。また、先端部分には漆は塗られておらず、縦二cm、縦五cmの長方形の穴が二か所穿かれている。なお、龍の彫刻付近の黒漆塗は劣化が進んでいる。

【部材③】縦一〇・七cm×横一五七・八cm×厚五・七cm

黒漆塗りで「正一丸」と大きく彫刻が施され、金泥が塗られている。当初、黒漆は全面に塗られていたと思われるが剥落が進んでいる。特に裏面は劣化が激しいが、材の保存状況は概ね良好である。また、材の上面にはホゾが二ヶ所付けられ、下面にはホゾ穴が二ヶ所穿かれているが、上面のホゾ一ヶ所は欠失している。なお、現在、他地区の鯨船では、この部材に船名を記した額が飾られていることが多い。

【部材④】縦一三・八cm×横一九二・五cm×厚一・八cm

表面は黒漆塗で、金泥を塗った扇文が五カ所に彫刻されている。また、一方の端部は雲形の形状をしており、金泥を塗った彫刻が施されている。雲形の端部と反対側の下部は方形に切り込みが入れている。部材側面は上下とも黒漆が塗られているが、裏面には装飾や塗装は施されていない。黒漆や金泥の状況は概ね良好である。

【部材⑤】縦一三・八cm×横一九二・五cm×厚一・八cm

部材④と対になった同一形状の部材で、部材④に比べると、端部の雲形にやや傷みがみられる。

【部材⑥】縦九・〇cm×横一二四・〇cm×厚二・〇cm

先端を斜めに切り、表面は黒漆塗、金泥を塗った菱形の彫刻が七ヶ所に施されている。部材側面上部には赤漆、下部には黒漆が塗られているが、裏面には塗装や装飾は施されていない。

【部材⑦】縦一五・五cm×横一四三・〇cm×厚二・〇cm

横長の平行四辺形状の部材で、表面は黒漆で塗装されているが、文様等は彫刻されていない。部材上部側面は朱塗りで丸みがつけられている。部材下部側面は黒漆が塗られている。部材裏側には装飾や塗装は施されていないが、一部をえぐって加工している。

【部材⑧】縦五・五cm×横一三六・〇cm×厚一・五cm

部材⑦と対になったと思われる横長の平行四辺形状の部材で、表面は黒漆で塗装されている。部材上部側面は朱塗りで丸みがつけられており、部材下部は、割れた痕跡がみられ、欠失していると思われる。部材裏側には装飾や塗装は施されておらず、一部をえぐって加工している。

【幕類①】縦四九・〇cm×横五〇・〇cm

赤色の羅紗の中央に直径九・八cmの祇園守紋を刺繍している。祇園守紋の外周に直径二一・二cmの円形状の使用痕がみられる。

【部材①】



【部材②】



【部材③】



【部材④】



【部材⑤】



【部材⑥】



【部材⑦】



【部材⑧】



【幕類①】



(部分拡大)



【幕類②】

(部分拡大)



【幕類③】



(部分拡大)



【幕類④】



図1 鈴鹿市長太地区 四ツ谷垣内鯨船 部材・幕類 撮影2022年

※写真の縮尺は不統一

【幕類②】長さ一八六・〇cm

赤色の羅紗に金糸で、小ぶりな龍（阿形）を刺繍している。

【幕類③】長さ一八三・五cm

幕類②と対になった幕で、赤色の羅紗に金糸で、小ぶりな龍（吽形）を刺繍している。

【幕類④】長さ一〇一・〇cm

無地の赤色の羅紗で、生地は幕類②・③と類似している。

## 2 諏訪神社祭礼の鯨船行事の伝播

### (1) 諏訪神社祭礼の鯨船行事の記録と鯨船の伝播

諏訪神社の祭礼である四日市祭については、東條寛氏が民俗学的な観点から多くの論考<sup>④</sup>を発表しており、前田憲司氏も地元新聞や写真等の資料に基づく緻密な研究を進めている。これらの成果や各鯨船行事保存会の資料等を参考に、諏訪神社鯨船行事の系譜をひく鯨船に関する主な記録を年代別に整理（表1）した。これに基づいて、鯨船の変遷と伝播について考えていきたい。

四日市市諏訪栄町に鎮座する諏訪神社は、近代以降、北勢地方最大の都市となった四日市市の中心部に位置する旧四日市町と浜田村の氏神である。寛政九（一七九七）年に刊行された『東海道名所図会』には、「例祭七月廿七日、祭式の楽車、練物あり、近隣郡詣して、賑しき神事也」と記されている。また、享和元（一八〇一）年の「四日市町諸色明細帳」にも「山車式輜」と記載されており、既に一八世紀末期にはかなり大規模な祭礼が行われていたことがわかる。

鯨船行事に関連する記録の初見は、明治四〇年刊行の『四日市志』に「安永年代（一七七二〜八一）の黎物」として記載されている「南中納

屋」をほこ、鯨つき」「大南納屋 鯨つき」「北納屋 同」（表1①<sup>⑦</sup>）とされているが、ここには鯨船の表記はない。次いで鯨船についての記録として注目されるのは、明治二三（一八九〇）年の伊勢新聞の記事で、七〇年程前（換算すると文政年間の一八二〇年頃）に、北納屋町に練り物の根源となる一旗を許し、南納屋町や袋町にも同様に許すことになったこと、当時の鯨船は竹製で祭礼終了後は直ちに打ち壊すようなものがあったが、その後、袋町が一年をかけて秘かに漆塗りの立派な装飾を施して祭礼に繰り出したため、他町も翌年から競って綺麗なものにしたことなど（表1③）が記されている。現在のような鯨船が確認できるのは、明治四（一八七一）年頃に成立したとされる木版本『四日市諏訪明神御祭礼黎物』で、現在とほぼ同様の鯨船山車三台が描かれている。

これらのことから、鯨船行事は一八世紀末期から一九世紀初頭にかけては、鯨突きを主題にした練り物が主で、鯨船は仮設的なものであったが、一九世紀初頭から中頃にかけて、各町が競い合うように立派な鯨船山車を製作し、一九世紀後半の幕末から明治初年にかけて、現在に近いような鯨船が成立していったと考えられる。このことは、明治十年代には現状に近い形の鯨船となったという南納屋町の伝承（表1⑨）とも整合する。

鯨船譲渡の記録は、明治末期から大正期にかけて多く見られる（表1⑩⑬⑮⑰）が、同時期には、鯨船を豪華に改修したという記録（表1⑫）も見られ、鯨船の譲渡は豪華な鯨船への改修に伴うものであることがわかる。また、改修の記録から、幕や彫刻の新調・改修は数年かけて、順次行われ（表1⑫）、船体と幕が異なる地区に譲渡される（表1⑬）こともあった。なお、曖昧な表現であるが、幕末から明治初期にも鯨船の譲渡が行われた伝承（表1⑦）がみられる。

これらの新造・改修・伝播の過程から、諏訪神社祭礼に奉納されてい

表1 諏訪神社祭礼鯨船行事の系譜をひく鯨船行事に係る新造・修理・譲渡等の記録

No.	年代	西暦	地区	内容	出典(参考文献参照)
①	安永年間	1772-81	諏訪神社	「南中納屋 をほこ、鯨つき」「大南納屋 鯨つき」「北納屋 同」	四日市志1912
②	享和3年	1803	諏訪神社	城戸賢公の詩、泗水行の中に、「龍頭の船、飾るに金玉を以てし、(中略)巨鯨を刺して天を拝して行く」とあり、鯨船の装り、鯨つきや鯨船の姿が如実にうたわれている。	南納屋町船船保存会1988
③	文政頃	1820頃	諏訪神社	伊勢新聞明治23年10月5日。今を去ること七十年程前、四日市町名主の伊達太衛門が、初めて此の練り物の根源といえる一旗を北納屋町に許すこととなり、近隣の南納屋及び袋町に対して、威を奮い勢いを示すようになったので、同様の一旗を他の両町へも許すこととなった。当時の鯨船は、竹製で花染の木綿に墨絵を写したもので装飾をほどこし、屋形もなく、ただ天幕を張り廻したものに過ぎず、祭礼終了後は直ちに打ち壊していた。その後、袋町の岩田久六が、一年をかけて秘かに立派な装飾をして、翌年の祭礼に練り出だため、他の両町も翌年から競って綺麗なものとした。	前田憲司1997
④	年不詳(近世)		諏訪神社	年不詳の近世文書に「中南納屋町鯨船損候」の記載があり、近世に中南納屋町(戦前の袋町)が鯨船を出していたことが確認できる。	東條寛2006
⑤	江戸後期から明治初期		勢州組	船名旗は高級な織物で江戸時代後期から明治初期と考えられる。刺繍の製作も基布の錦織と同じく江戸時代後期から明治初期と考えられる。五尺、横幕は江戸幕末頃から明治前期の製作と考えられる。	調査資料提供四日市市2015
⑥	幕末頃から明治初期		南楠	おそらく幕末から年中行事として行われたのであろう。伝えられるところによると初めのころは伝馬船のような小さな船で、行事を操作する人も少数であった。明治13年大綱というのができてこの人達が主体となって、神社に奉納する祭りの行事として、次第に盛大になってきた。	楠町史1978
⑦	幕末頃から明治初期		南楠 →北長太	南納屋から船を購入する前は小さな船で祭りをしており、その船は北長太に譲ったと聞いている」という古老達の話。	南楠鯨船保存会2020
⑧	明治4年	1871	諏訪神社	『四日市諏訪明神御祭礼黎物』卷子本。袋町(鯨船正一九)→大南納屋(鯨船勢州組)→北納屋町(鯨船明神丸)	東條寛1997
⑨	明治10年代	1877	南納屋町	明神丸は明治十年代に現状に近い形式になったとされる。	四日市市の祭りを学ぼう会2010
⑩	明治24年	1891	長太四ツ谷	四ツ谷垣内は明治24年氏子の数が少なく、諸役にも事欠くため中止され、馬場垣内のみが継続されてきた。	長太鯨船保存会1992
⑪	明治38年	1905	北納屋町 →七ツ屋町	七ツ屋町が北納屋町より船(台船・勢州組)を購入。	調査資料提供四日市市2015
⑫	明治42年	1909	南納屋町	明治36年、館の苫を金糸で葺き、棟には金の鯨の彫物…。明治42年、大々的に改修が施され、舳先には金張りの竜の彫刻が施され…。大正10年、全部塗り替え、金箔補修、館の四枚戸には練り抜きの彫刻…。	南納屋町船船保存会1988
⑬	明治末期から大正	1910?	南納屋町 →南楠	明神丸の古船や飾りは南楠へ(龍神丸)。胴幕は七ツ屋へと受け継がれた。	四日市市の祭りを学ぼう会2010
⑭	大正2年	1913	諏訪神社	伊勢新聞大正2年9月27日。鯨船の山車は袋町の正一九が元祖で、その次が南納屋の神明丸(マ)、北納屋の勢州丸が一番新しい。	四日市市の祭りを学ぼう会2008
⑮	大正時代		袋町 →磯津	袋町の大正丸がその前身であり、袋町で大正時代に造り替えが行われた時に古手の正一九を購入し、鯨船行事を習って始めたことに由来するという伝承をもっている。	四日市市教育委員会2002
⑯	大正10年	1921	南納屋町	幕押さえの裏書に、大正十年に桑名の彫刻師が彫刻を施したと記されている。	四日市市の祭りを学ぼう会2008
⑰	昭和3年	1928	南納屋町 →南楠	南納屋から台船を購入したのは、昭和3年ではないかと推測。昭和3年と添え書きのある集合写真が残る、台船の購入を記念して写したのではないかと。数年前までは龍神丸の檣受けを支える貫木に明神丸が使用する諏訪神社の文紋「梶の葉」が残っていた。	南楠鯨船保存会2020
⑱	昭和8年	1933	南納屋町	幕二枚を新調	四日市市立博物館寄託資料
⑲	昭和20年	1945	諏訪神社	戦災で諏訪神社祭礼に奉納していた3町の鯨船が消失	四日市市教育委員会2002
⑳	昭和22年	1947	南納屋町	疎開していた部材をもとに、台船を建設し、復活	四日市市教育委員会2002
㉑	昭和22年	1947	南楠	現在の船体は昭和22年に四日市市の安田造船所で作られたもの。昭和22年以前の船体は、四日市市南納屋町から譲渡されたもの。	四日市市教育委員会2002
㉒	昭和52年	1977	南楠	従来の船が老朽化したので、昭和50、51年の祭りを休んで、昭和52年、真紅の船に金箔で細工し目も鮮やかな行事がくりひろげられた。	楠町史1978
㉓	平成6年	1994	長太	平成6年に新造	四日市市教育委員会2002
㉔	平成7年	1995	南楠	昭和22年以来、48年ぶりに台船を新調。下箕田の船大工が製作。	南楠鯨船保存会2020
㉕	平成9年	1997	磯津	現在の正丸は昭和62年に復活した鯨船行事で使用していた船が老朽化したため、台船部分を平成9年に新規に作成。	四日市市教育委員会2002
㉖	平成25年	2013	七ツ屋町 →勢州組	七ツ屋町から本町通り商店街が譲り受け。鯨船勢州組復興連合会を経て鯨船勢州組保存会設立。	資料提供鯨船勢州組保存会2017

た三町の鯨船が、明治末期から大正期にかけて、それぞれ新しく更新され、南納屋町の「明神丸」は南楠へ、北納屋町の「勢州組」は七つ屋町へ、袋町の「正一丸」は磯津へ譲渡され、鯨船行事は、塩浜街道に沿って南に伝播していった様子をみてとることができる。なお、七つ屋町の鯨船は、平成二六（二〇一四）年に、四日市本町通商店街振興組合が譲り受け、現在は鯨船勢州組保存会（以下「勢州組」という。）が鯨船行事を担っている。

## （2）諏訪神社祭礼の系譜をひく鯨船山車の差異

このような鯨船行事の伝播により、幸いにもかつて諏訪神社祭礼を賑わした三町の鯨船は全て残されていることになり、これらの鯨船の台船や部材の大きさを比較（表2）することで、具体的な差異による鯨船の形状の変遷について考えていきたい。なお、比較に際しては、鈴鹿市長太地区の鯨船や近接する富田地区の鯨船もあわせてみていくこととした。

まず、台船の最大長は南納屋町の「明神丸」が最も大きく、次いで袋町「正一丸」の系譜をひく磯津の「大正丸」と南納屋町「明神丸」の系譜をひく南楠の「龍神丸」がほぼ同じ規模であるのに対して、北納屋町「勢州組」の鯨船である勢州組の「勢州組」は「明神丸」の八四%とひと回り小さく、長太地区「天王丸」は「明神丸」の七一%とさらに小型である。このことは、勢州組の「勢州組」が北納屋町から七ツ屋町に譲られたのが明治三八年と最も古く、時代が新しくなるにしたがって、船体が大きくなっていったと考えられる。このことは練り物の名称が「鯨突き」から「鯨船」に変わり、時代を経るごとに鯨船の豪華さが重要視されるようになったことと整合する。

また、最大長と最大幅の比率をみると、諏訪神社祭礼の系譜をひく鯨船は富田地区の鯨船に比べて細長く、形態に大きな差異があることがわ

かる。

次にミオシやゴシヤクの全長は、諏訪神社祭礼の系譜をひく他の鯨船に比べて、鈴鹿市長太地区の鯨船山車は六三%とかなり短い。四ツ谷垣内のミオシは更に短い。長太地区馬場垣内の「旧天王丸」のミオシは基部と水押御紋の板が付く先端部に二分割されており、基部の長さとして比較すると、ほぼ類似する長さである。

横幕については、各鯨船の台船の最大長とよく似た傾向を示すが、現在の鈴鹿市長太地区の鯨船山車には横幕がない。四ツ谷垣内の横幕は極端に短く、他に例をみない。

## （3）四ツ谷垣内の鯨船部材・幕類の位置付け

これまでみてきた鯨船行事の変遷や鯨船の伝播を踏まえ、令和五年八月一七日に四ツ谷垣内鯨船の部材等の再調査を行った。その際、諏訪神社祭礼で現在も鯨船行事を行っている南納屋町鯨船保存会会長加藤亘氏に同行を依頼し、多くの知見を得ることができた。その成果を踏まえて、以下考察する。なお、部材の名称は、南納屋町「明神丸」に倣った。

部材①は、鯨船側面前方に装着されるゴシヤク（五尺）と思われる、右側面が左側面より長いことから、右舷の部材と思われる。全体に黒漆を塗り金泥で文様を飾るなど華麗な装飾を施してはいるものの、勢州組を除く他地区の鯨船のゴシヤクが豪華な全面金箔貼りの彫刻で飾られたものが多いことを考えるとシンプルで原初的な印象を受ける。なお、勢州組は北納屋町の古い鯨船を継承したもので、ゴシヤクは全面金箔貼りの彫刻ではなく、一部に刺繍が用いられている（写真3）。また、戦前の最も完成された形を残す南納屋町明神丸のゴシヤクは、下に付く幕押さえの装飾の彫刻を一体化させた非常に豪華なもの（写真4）で、時代によるゴシヤクの変化をみてとれる。

表2 北勢地方の鯨船の大きさの比較

地区	船名	台船(単位は全てcm)			ミオシ	ゴシヤク	横幕	測量値出典	備考
		最大長	最大幅	長/幅	全長	長さ	長さ		
南納屋町	明神丸	7,035 <i>1.00</i>	1,870 <i>1.00</i>	3.76	4,860 <i>1.00</i>	2,790 <i>1.00</i>	5,840 <i>1.00</i>	『鯨船山車明神丸』	
勢州組	勢州組	5,880 <i>0.84</i>	1,350 <i>0.72</i>	4.36	4,500 <i>0.93</i>	2,250 <i>0.81</i>	4,900 <i>0.84</i>	筆者による略測	勢州丸(北納屋町)を譲受
磯津	大正丸	6,700 <i>0.95</i>	1,400 <i>0.75</i>	4.79	4,500 <i>0.93</i>	3,450 <i>1.24</i>	5,400 <i>0.92</i>	筆者による略測	正一丸(袋町)を譲受
南楠	龍神丸	6,600 <i>0.94</i>	1,730 <i>0.93</i>	3.81	4,800 <i>0.99</i>	2,830 <i>1.01</i>	6,300 <i>1.08</i>	『保存会発足60周年記念誌 弥栄』	明神丸(南納屋町)を譲受
長太	天王丸	5,000 <i>0.71</i>	1,300 <i>0.70</i>	3.85	3,050 <i>0.63</i>	1,750 <i>0.63</i>	なし	筆者による略測	
長太	旧天王丸	4,900 <i>0.70</i>	1,200 <i>0.64</i>	4.08	3,150 <i>0.65</i>	不明	なし	鈴鹿市による略測	水押しは先端部1,400+基部1,750に分割
長太	長一丸				1,965 <i>0.40</i>	1,925 <i>0.69</i>	1,860 <i>0.32</i>	筆者による略測	正一丸(袋町)を譲受
富田 (中島組)	神徳丸	5,621 <i>0.80</i>	2,052 <i>1.10</i>	2.74	4,242 <i>0.87</i>	2,900 <i>1.04</i>	5,260 <i>0.90</i>	中島組資料	

- ・イタリック体は、南納屋町「明神丸」を1として比率を示している。
- ・筆者による測量は祭礼実査の際に略測したもので、一定の誤差を生じている可能性がある。
- ・鈴鹿市長太「旧天王丸」は非公開。データは鈴鹿市教育委員会提供。



写真3 「勢州組」のゴシヤク 撮影2022年



写真5 四ツ谷垣内鯨船部材  
先端部分のホゾ穴  
撮影2022年



写真4 「明神丸」のゴシヤク 撮影2022年



写真6 「旧天王丸」  
ミオシ接合部分  
写真提供鈴鹿市2023年



部材②は、鯨船先端の軸先に取り付けるミオシ（水押し）と思われる部材である。先端部分に長方形の穴が二ヶ所穿かかれている（写真5）ことから、何らかの部材が接続していたと思われる。他地区の鯨船にもみられる水押御紋の円盤が取り付けられていた可能性もあるが、龍の彫刻が、先端のごく近いところに彫られており、水押御紋の幕で彫刻が隠れてしまうことやボルト穴の位置から、「旧天王丸」と同様の分割式のミオシ（写真6）の基部と考えるのが妥当ではないかと思われる。

部材③は、鯨船後方のシンマイド（四枚戸）の上部材であるヨコガミと思われ、上部のホゾはカジバサミと思われる。この部材から、諏訪神社祭礼に出ていた袋町の鯨船「正一丸」であることが明らかである。「長一丸」の名は「正一丸」に長太の「長」を置き換えたものと思われる。

部材④⑤は、上部の湾曲が部材①ゴシャクの下部の湾曲と一致することから、船体側面を飾る横幕の上部に付けるマクオサエ（幕押さえ）と考えられる。雲形は船体後方側につき、部材④が右舷、部材⑤が左舷と思われる。

部材⑥は一方の端部が斜めに切断されている。船体後方には、このような形状の部材は必要ないことから、船体前方軸先付近の部材の可能性が高いと考えられるが、使用場所は特定できなかった。

部材⑦⑧は、裏側の刳られた形状が、部材②ミオシの形状と一致することから、船体側面の横幕をミオシの側から押さえるマクオサエ（幕押さえ）と思われる。ミオシとの位置関係から部材⑦が右舷、部材⑧が左舷と考えられる。

幕類①は、円形状の使用痕から船の軸先を飾った水押御紋と思われる。祇園守紋は天王祭と関係が深いこと、旧「天王丸」の水押御紋をつける円形の板の大きさともほぼ一致すること、生地が他の幕類とは異なるこ

となどから、鯨船が長太地区に来てから詠えられたものと考えられる。

幕類②③は、形状から船体前方を飾る横幕と考えられ、幕類②は左舷、幕類③は右舷と思われる。部材④⑤のマクオサエと幕上部の長さが一致すること、前方上部に穿かれた角穴がマクオサエ下部の形状と一致すること、幕前方部の長さが部材⑦⑧のミオシ側のマクオサエの長さとはほぼ一致していることなどから、かつて諏訪神社祭礼に奉納していた「正一丸」の幕である可能性が高いと思われる。

幕類④は、形状や生地は幕類②③に似ているが、大きさは小ぶりである。用途は特定できなかった。

### 3 まとめかえて

諏訪神社祭礼の鯨船行事についての近世・近代の記録は少なく、今回発見された鈴鹿市長太四ツ谷の鯨船の部材等の情報も限られていることから、確定的なことを論じることは難しいが、諏訪神社祭礼の鯨船行事の伝播や四ツ谷垣内鯨船部材等の調査結果から、四ツ谷垣内鯨船部材等の持つ意義について、次の三点を指摘し、検討を深めることで、まとめにかえたい。

①他地区の鯨船の部材に比べて、極めて小型であるが、現在の長太地区の鯨船とは共通性がみられる。

②部材の多くに、簡素ではあるが漆や金で装飾された龍などの彫刻が施されている。

③正一丸の彫刻から、諏訪神社祭礼の袋町の鯨船「正一丸」の部材であることは明らかである。

まず、①について、他地区の鯨船部材と長さ等を比較することで、時代が新しくなるにしたがって、鯨船が大きく豪華になっていったことが

具体的に明らかになった。すなわち、鯨船行事は練り物としての鯨突きに始まり、徐々に鯨船の比重が高くなり、大きさや豪華さが求められるようになってきたのではないか。長太地区の鯨船について、「ずいぶん」と省略された印象が強い」という見方もあるが、逆に大型化して多様な要素が付加される以前の姿と考えた方が自然だと思われる。

次に、②について、四ツ谷垣内鯨船部材は、ミオシの彫刻やゴシヤク  
の金で装飾された文様、部材の表面に塗られた漆など、装飾性は高いものの非常にシンプルで、前田憲司氏が調査した鯨船の原初的な姿を記述した伊勢新聞の記事（表1③）を対比すると非常に暗示的であり、該当する全文を引用する。

「然るにその後袋町に於て岩田久八なるものありて一ヶ年私かに鯨船を倉庫に預り置き漆を塗りて翌年の祭礼日に繰り出したれば其の美麗なるに驚かざるものなく他町皆な其の面目を失ひたり此の翌年よりは南納屋町及び袋町（ママ）も同じく鯨船に漆を塗りつくる事となり漸次相競争して遂に今日の美観を呈するに到りしなり」と（伊勢新聞 明治三三年九月一三日）

すなわち、漆を塗ることが、豪華さの最初の段階であり、四ツ谷垣内鯨船部材は、これらに近い姿を残しているのではなからうか。今回、加藤亘氏の協力により、長一丸のミオシ、ゴシヤク、幕、マクオサエの位置関係をほぼ特定し、舳先部分をイメージ化することができた（図2）。現在、各地区で行われている鯨船行事の鯨船の原初的な姿とみることはできないだろうか。

最後に③について、前述した『四日市諏訪明神御祭礼黎物』には、三台の鯨船が描かれている。このうち、「明神丸」と「勢州組」は波を描いた横幕を付けているのに対して、「正一丸」は紗綾文の横幕を付けており（図3）、四ツ谷垣内鯨船部材のゴシヤクに施された紗綾文との関



図2 四ツ谷垣内鯨船舳先部分の復元イメージ 協力加藤 亘氏

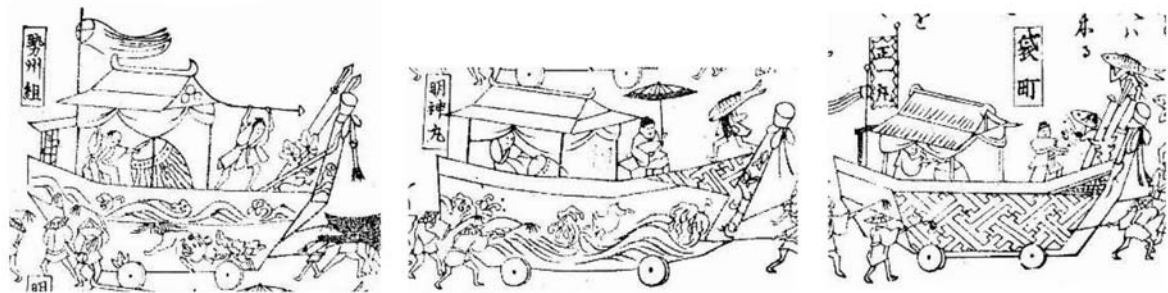


図3 『四日市諏訪明神御祭礼黎物』（部分） 所蔵水谷宣夫氏・撮影前田憲治氏

係性を感じさせる。また、正一丸の横幕は、他の二町に比べると短く、当初は四ツ谷垣内鯨船の幕のように舳先に近い部分だけを飾っていたのが、側面全体を幕で飾る現在の姿に変化していったと考えるのは想像が過ぎるだろうか。

袋町の「正一丸」が、四ツ谷垣内にもたらされた経緯は定かではない。直接なのか、それとも他の地区を経てもたらされたのか。南楠に伝わる「南納屋町から船を購入する前は小さな船で祭りをしており、その船は北長太に譲ったと聞いている」（表1⑥⑦）という伝承は、小さな鯨船を北長太に譲ったという点で、気になるところではあるが、南楠が南納屋町から船を譲ってもらったのは、明治末期から大正にかけてと伝えられおり、時代があわない。南楠の伝承が一代飛んでいると考えれば、その可能性もないとは言えないが推測の域を出る話ではない。

鯨船行事は熱い思いにあふれた祭りである。豪華に飾りたてられた鯨船、激しい練り、船上で舞い、鯨を討つオドリコ、激しく動くクジラ、場面に応じて歌われる唄の数々。鯨船行事に情熱を注いだ幾世代もの人々に感謝し、筆を置くこととしたい。

本稿執筆にあたり、四ツ谷垣内の皆さま、加藤亘氏、加藤正彦氏、佐久美文香氏、前田憲司氏、水谷宣夫氏、各鯨船行事保存会、四日市市立博物館、四日市市役所、鈴鹿市役所の関係者の皆さまにお世話になりました。深く感謝申し上げます。

#### 註

(1) 四日市祭りについては、明治四〇年刊行の『四日市志』に安永年間（一七七二〜八一）に、「鯨つき」の行事が行われていたことが記されている。また、富田では、鳥出神社の天明元（一七八一）年銘の御座船模型について、この模型が奉納されてから鯨船行事が始

まったという神主家の伝承があるほか、東條寛「鯨船行事の成立と民俗的背景」『三重県史別編民俗』（三重県、二〇一二年）に、中島組の鯨船「神徳丸」の金具の裏に、文久四（一八六四）年の銘があったことが記されている。

(2) 三重県鈴鹿市長太鯨船保存会『文化財愛護活動推進方策実践研究報告書』（一九九二年）。

(3) 三重県鈴鹿市長太鯨船保存会『文化財愛護活動推進方策実践研究報告書』（一九九二年）による。

(4) 東條寛氏は四日市祭について、多くの論考を発表しており、その成果は、東條寛『都市祭礼の民俗学―四日市祭の歴史の民俗―』（岩田書院、二〇〇六年）にまとめられている。

(5) 前田憲司氏は、個人の研究に加えて、四日市市の祭りを学ぼう会の活動の中でも、編集・執筆を担っている。

(6) 東條寛『四日市市諏訪明神御祭礼黎物』に見る四日市祭―『郷愁の四日市祭』（四日市市立博物館、一九九七年）、東條寛「大山と練り物―近世四日市祭の民俗的構造―」『四日市市立博物館研究紀要第九号』（四日市市立博物館、二〇〇二年）による。

(7) 明治四〇年の記録であるが、東條寛「地方都市における都市祭礼の変遷―四日市祭の場合―」『四日市市立博物館研究紀要第七号』（四日市市立博物館、一九九九年）では「この表がどのような史料に基づくものか不明であるが、（中略）安永年間と時期を特定していることから、ある程度の信頼を置いて良いと思われる。」としており、筆者も同様に考える。また、町名については、四日市市の祭りを学ぼう会「講演会資料 連続講座 四日市市の祭りを学ぼう会 諏訪神社祭礼「四日市市祭」のこと」（四日市市の祭りを学ぼう会、二〇〇八年）に、南中納屋町は袋町、大南納屋町は南納屋町に町名

が変遷していることが記載されている。このことから、明治期に鯨船を出していた三町が、そろって鯨突きの練物を行っていたことが伺える。

(8) 現在、長太地区で使われている平成六年度に新造された「天王丸」のほか、それ以前に長太地区馬場垣内で使用されていた旧「天王丸」を比較した。旧「天王丸」は、戦後、ほとんど使用されていないことから、戦前に使用された長太地区の鯨船の原型を伝えるものと考えられ、鈴鹿市教育委員会が保存（非公開）している。

(9) 東條寛「北勢地方南部の鯨船行事について―北勢鯨船行事調査から―」『四日市市立博物館研究紀要第八号』（四日市市立博物館、二〇〇一年）による。

#### 【参考文献】

- 伊藤善太郎『四日市志』一九〇七年  
楠町史編纂委員会『楠町史』一九七八年  
南納屋町鯨船保存会『三重県指定有形文化財 鯨船山車明神丸』一九八八年  
三重県鈴鹿市長太鯨船保存会『文化財愛護活動推進方策実践研究報告書』一九九二年  
東條寛「木版『四日市諏訪明神御祭礼黎物』について」『四日市市立博物館研究紀要第一号』一九九四年  
前田憲司「伊勢新聞に見る明治の四日市祭」『郷愁の四日市祭』一九九七年  
東條寛「『四日市市諏訪明神御祭礼黎物』に見る四日市祭」『郷愁の四日市祭』一九九七年  
東條寛「地方都市における都市祭礼の変遷―四日市祭の場合―」『四日市市立博物館研究紀要第七号』一九九九年

東條寛「北勢地方南部の鯨船行事について―北勢鯨船行事調査から―」『四日市市立博物館研究紀要第八号』二〇〇一年  
東條寛「大山と練り物―近世四日市祭の民俗的構造―」『四日市市立博物館研究紀要第九号』二〇〇二年

四日市市教育委員会『北勢鯨船行事調査報告書』二〇〇二年  
四日市市楠総合支所『新編楠町史』二〇〇五年

東條寛『都市祭礼の民俗学―四日市祭の歴史の民俗―』二〇〇六年

四日市市の祭りを学ぼう会「講演会資料 連続講座 四日市市の祭りを知ろう 諏訪神社祭礼「四日市市祭」のこと」二〇〇八年

四日市市の祭りを学ぼう会『四日市市祭』二〇一〇年

東條寛「鯨船行事の成立と民俗的背景」『三重県史別編民俗』二〇一二年

四日市市教育委員会「七ツ屋町・新勢州丸」用具調査概要報告 四日市市諏訪神社鯨船山車」二〇一五年

鯨船勢州組保存会・曳綱会「鯨船勢州組」とは、こんな鯨船」二〇一六年

六年

南楠鯨船保存会『弥栄 南楠鯨船保存会発足60周年記念誌』二〇二〇年

四日市市三重大学共同研究『中島組神徳丸一隻実測調査報告書』二〇二二年

二二年

前田憲司「講演会資料 四日市祭と四日市の大山（大山車）文化について」二〇二二年

三重県総合博物館『第31回企画展 集まれ！三重のクジラとイルカたち』二〇二二年